

## 左 と 右

二 宮 敏 行 (物理)

夏のある日、小堀さんから、ガードナー著「自然界における左と右」(坪井忠二、小島 弘共訳、1971年)の書評を依頼された。これには理由がある。私は今年の初めに右手首を骨折し、ギブスで固定されたのとその後の回復期間を含めて、約3カ月間、右手の使えない生活を送った。そのような経験をもとにしての上記の本の書評というのも一風変わって面白くろうと小堀さんの(編集者の?)好奇心を刺激したらしいのである。大分前にこの本を割合面白く読んでいたし、なるほどもう一度読みなおして見るかと気軽に引受けてしまった。一面的な批評になっても、文字通り片手落ちの言い訳が成立しそうだ、いささか無責任な気分でもあった。

早速、読みなおし始めたが、少し読み進むうちに、どうにも違和感があって放り出してしまった。違和感の原因ははっきりしている。それは、この本の中心になっている「右か左か、対称性は」という興味の持ち方にある。一方、私が右手を使えない間常に感じていたことは、右か左かではなく、片手でできるか両手を必要とするかということだったのである。

骨折した頃、皆さんから右手だから大変ですねと慰めの言葉をいただき、自分自身でもどうせ骨折するなら左手ならまだ楽だったろうと思ったものである。ところが、少し左手のみの生活を経験してわかったことは、右でも左でも大して違わないということであった。両手が使える時には、はっきり気がつかないが、片手でやっているつもりの時でも、もう一方の手を一寸そえている場合が多い。そして、私が不便を感じたのは、まさにそういう場合だったのである。また、人間には尻尾がないので、歩く時の体のバランスは両手が使えないと保ちにくい。(ただし、倒れやすい不安感は階段を下りの時に特に強く感じたから、心理的な面もあるのかも知れない。)

というわけで、私の得た結論は

「左と右は大して違わない。そして、われわれは右も左も必要とするのである。」

ということであった。(どなたか、追試して下さいますか!)なお、この原稿はもちろん右手で書いている。そして、原稿締切り近くなってガードナーの本をまた読み直し始めたが、違和感は感じなくなってしまっていた。身体的にはたしかに健康に戻ったのだろうが、精神的にはまた一面的になってきているのかも知れない。

○

さて、骨折と私の研究とは関連がある。いささか風が吹けば桶屋が儲かる式の話であるが、説明させてください。私の研究対象は格子欠陥(格子の乱れ)である。固体の性質の多様さ、変化の可能性、はては結晶成長も多くは格子欠陥の存在のおかげである。(これは社会についても同じであろう。多分、完全な社会なんて、まるで面白くないに違いない。)格子欠陥の一種に転位というものがある。塑性変形のような原子の集団的な運動にかかわるものとして重要なものだが、転移(相転移)と同音でまぎらわしい上に、近頃は、活字になった時でも混乱していることがある。元来、転位は dislocation の訳であるが、辞書を引くとまず脱臼とある。かつて、“dislocation and fracture (材料関係では破壊を意味する)”という題の本が出た時、ある金属関係の先生が購入したら“脱臼と骨折”の本だったというまことしやかな伝説がある。というのが、風が吹けば……式の説明である。

このような言葉のまぎらわしさは、もちろん、あちこちにある。私は、近頃、非晶質固体や液体のような大きく乱れた構造に、非常に多くの転位の集合状態として扱う立場から興味を持っている。とける(融解)問題がなかなかとけないなどというのは駄洒落としても陳腐だ

が、彼と物理をやるのと彼をブツリとやるのでは結果は大違いである。これも言葉の欠陥のおかげの多様さ、味い深さ(?)であろうか。それとも、言葉は欠陥商品なのだろうか。

考えをはっきりさせるためには、言葉をきちんとせね

ばならない。ところが、いったん言葉ができると、こんどは、ほんとうにはわかっていない事柄でも、その言葉を使うとわかったような気になってしまうことが多い。言葉は両刃の剣である。